

## マタイによる福音書15章 「異邦人の救いの前ぶれ」

### 1A ユダヤ人のしきたり 1-20

1B 人の教えを守る虚しさ 1-11

2B 心から出てくる汚れ 12-20

### 2A 異邦人の信仰 21-39

1B カナン人の女の願い 21-28

2B イスラエルの神への栄光 29-31

3B イエスが率先された四千人の給食 32-39

## 本文

マタイによる福音書 15 章を開いてください。私たちの学びは、「退く」というキーワードが出て来るところを見て行っています。イエス様が、13 章において天の御国の奥義の喩えを語られたのは、ユダヤ人指導者が、ご自分の奇跡をサタンによるものと中傷したからです。聞く耳のある者にだけ、聞くことができる内容であります。それで、弟子たちにだけその喩えの解き明かしを行われます。

そして 14 章に入ると、なんとバプテスマのヨハネがヘロデ・アンティパスによって殺されます。キリストの働きの先駆者であった彼が殺されたのだから、イエス様ご自身も殺されるということは自明です。それでイエス様は群衆から退かれようとされます。けれども、群衆は付いて来ます。深く憐れんで、癒しを行われました。退くといっても、いつもの働きをやめたわけではありません。むしろ、それこそがイエス様の心そのものだからです。けれども、退く時間が増えて、父なる神との時間、弟子たちとの時間を増やされました。そして、弟子たちが将来、イエス様が天に昇られてから、自分たちで、イエス様のお名前によって同じような働きをします。それでイエス様は絶えず、弟子たちに関わらせるように敢えてさせて、奇跡を行われました。五千人の給食がその典型です。

15 章では、さらにイエス様が退かれる働きを行われます。ユダヤ人に指導者が、あまりにも頑なで心が離れているのを嘆きながら、ユダヤ人の住んでいる地域そのものから退かれるようになります。そして、将来、広がっていく異邦人への宣教の前味を知ってもらいます。

### 1A ユダヤ人のしきたり 1-20

1B 人の教えを守る虚しさ 1-11

1 そのころ、パリサイ人たちや律法学者たちが、エルサレムからイエスのところに来て言った。2 「なぜ、あなたの弟子たちは長老たちの言い伝えを破るのですか。パンを食べるとき、手を洗っていません。」

エルサレムからわざわざ、ガリラヤ湖畔のところまでイエスのところに来ました。これは、宗教指導者が、半ば公にエルサレム本部から派遣される形で、公式にイエスを批判するためにやって来たものと思われます。「長老たちの言い伝え」とありますが、これは昔からの言い伝えのことであって、その言い伝えにしたがって弟子たちが手を洗っていないと咎めています。これが初めてのことでありません。イエス様が安息日にシナゴグにおられた時に、片手の萎えた人を彼らが敢えてそこに連れてきていました。そして、「安息日に癒すのは律法にかなっていますか。」と質問しています(12:10)。安息日についても、長老たちの言い伝えがあって、それを口伝律法と言いますが、そのことに違反していたので批判していたのです。

イエス様の働きは、人を癒し、解放するというものでしたが、ユダヤ人の宗教指導者の情熱は人に規則を課して、縛ることでした。今でも、宗教というものは人々の心を縛っていますね。以前もお話したように、ユダヤ人たちはバビロン捕囚以後、帰還してから律法を守るために献身をし始めました。偶像礼拝によってバビロンに捕え移されたことに、深い悔恨の念からそれを行っていました。しかし、それを行っているうちに、「この律法について、今の私たちの生活では何が禁じられ、行って良いものか」という垣根のようなものを作っていきようになっていきました。それが口伝律法と呼ばれます。それが紀元後 3 世紀にミシュナとなって実際に書き記されました。当時、イエス様が地上におられたころ、事実上、モーセの律法よりも、これらの口伝律法を守ることのほうが重視されていたのです。

清めの儀式についてですが、あなたは手先を上に向けて両手を差し出さなければなりません。手に水が注がれる間、あなたは両手を前後上下にこすります。そしてその水は手首からポタポタと落ちなければなりません。なぜなら、その水は、手についていた汚れたものに触れて、既に汚れているからです。それで、その水が絶対に自分の上には落ちないようにしなければなりません。それで、あなたは水が手首から落ちて、腕に垂れかからないように手を伸ばして手先を上に向けておきます。そうでないと、腕の部分が汚れてしまいます。そして、水を流してもらって手を上向き状態で洗ったら、汚れた指からの汚い水が手のひらや甲の部分に流れてしまったので、今度はそれを取り除かなければなりません。そこで、手先を下に向けて、手の上から水が注がれる間、手を下向きに擦ります。そして最後に、水を注いでもらいながら、指を擦り合わせて、すべての汚れを取り除くのです。

そして、この手の洗いの清めについて、聖書の中に、律法の中に書いてあるか？という書いてありません。そこでイエス様は、次のように逆に非難されます。

3 そこでイエスは彼らに答えられた。「なぜ、あなたがたも、自分たちの言い伝えのために神の戒めを破るのですか。4 神は『父と母を敬え』、また『父や母をののしる者は、必ず殺されなければならない』と言われました。5 それなのに、あなたがたは言っています。『だれでも父または母に向か

って、私からあなたに差し上げるはずの物は神へのささげ物になります、と言う人は、6 その物をもって父を敬ってはならない』と。こうしてあなたがたは、自分たちの言い伝えのために神のことは無にしてしまいました。

律法と律法主義の違いです。イエス様は律法を敬い、律法を大事にされました。けれども、律法主義は必ず二重基準、偽善をもたらします。ここで、十戒にある「あなたの父と母を敬え」という戒めを引用されています。また父と母を罵るようなことは、死に定められるとも書かれています。それにもかかわらず、パリサイ派の中では、自分の両親がパリサイ派でなければ、援助をし、扶養をするのを拒む傾向がありました。そこで、マルコ伝には書かれていますが、コルバンと呼ぶ「ささげ物」の規定を作りました。それは、両親を援助しなければいけないのに、「神へのコルバンとなりました」と言うことによって、父母を敬ってはならないとまで規定していたのです。そのコルバンという言葉は、両親にとって罵り、呪いの言葉と聞こえたことでしょう。非常に利己的な教えですね、信者でなければ自分が教会のために捧げたと言え、その両親を扶養しなくてよいという教えと似ています。パウロは、テモテ第一の手紙で両親を養わない者は、不信者よりも悪いことをしていると戒めましたが、そのような律法主義が入り込んでいたからかもしれません(5:8)。

7 偽善者たちよ、イザヤはあなたがたについて見事に預言しています。8 『この民は口先でわたしを敬うが、その心はわたしから遠く離れている。9 彼らがわたしを礼拝しても、むなしい。人間の命令を、教えとして教えるのだから。』

イエス様が、イザヤが預言したことについて引用しておられます。イザヤの預言では、当時、ユダ王国がアッシリアからの脅威があったので、南にあるエジプトと同盟を結ぼうとしていました。それは頼りにならない力だ、シオンにおられる主に拠り頼めというのが、イザヤの預言でした。ところが、そういったことは理解できないとしてあしらってしまったのです。けれども、彼らは礼拝をエルサレムの神殿できちんと行っていました。宗教的なことは変わらずに行なっていたのですが、肝心の主の戒めについては心が鈍くなっていたのです。それで、口先では神を敬っているが、「心」が離れているという大きな問題を取り上げています。そして、主の戒めではなく、人に言われているからという理由だけでそれらを守っているという、心の動機が間違っていることを戒めています。

私たちに常に、突き付けられている課題です。それは、私たちの心は神の声に対していともたやすく鈍くなります。主が語られているのに、自分の肉の思いでそれを無意識のうちに、また意識的に拒み、云わば自分の肉の声に聴き従ってそれを行おうとします。それが、自分から出たものであれ、いわゆる世の中でこうしなければいけないと言われている教えであれ、それを行うことに心を寄せて、肝心の神の言葉を退けてしまっています。本来、律法、または神の命令というのは私たちを自由にします。ヤコブが言いました、「自由をもたらす完全な律法を一心に見つめて、それから離れない人は、すぐに忘れる聞き手にはならず、実際に行う人になります。(1:25)」御霊によつ

て心が一新されていく中で、自分の肉の力によって規則を守るのではなく、御霊によって新たにされた心で、主の命令に聞き従うことができるようになるのです。

10 イエスは群衆を呼び寄せて言われた。「聞いて悟りなさい。11 口に入る物は人を汚しません。口から出るもの、それが人を汚すのです。」

イエス様は、宗教指導者に語られた後、群衆を相手にして語られました。再び喩えを使われまして、説教のやり方を変えられたのです。それが、口に入る物は汚さないけれども、口から出るものが汚れるということです。

## 2B 心から出てくる汚れ 12-20

12 そのとき、弟子たちが近寄って来てイエスに言った。「パリサイ人たちがおことばを聞いて腹を立てたのをご存じですか。」13 イエスは答えられた。「わたしの天の父が植えなかった木は、すべて根こそぎにされます。14 彼らのことは放っておきなさい。彼らは盲人を案内する盲人です。もし盲人が盲人を案内すれば、二人とも穴に落ちます。」

イエス様が語られたことで、パリサイ人たちが相当頭に来ていたようです。弟子たちはこのことが、少し不安でした。パリサイ派と言えば、それこそユダヤ教の基準であり、正しい解釈を施す権威だと思われていたからです。モーセの座に着いていると言われていました(マタイ 23:1)。けれども、それほど腹を立てるのであれば、どうするのか？と混乱してしまったのです。

けれども、イエス様はここで、はっきりとさせなければいけませんでした。二つのことです。彼らは救われていません。「わたしの天の父が植えなかった木は、すべて根こそぎにされます。」とされています。バプテスマのヨハネが、彼らに対して「斧はすでに木の根元に置かれています。だから、良い実を結ばない木はすべて切り倒されて、火に投げ込まれます。(3:10)」と宣言していました。イエス様はさらに突っ込んで、切り倒す以上に、根こそぎにされるとされています。どんなに、ユダヤ人社会の中で定着し、根を張っているとされても、天の御国では根こそぎにされるということです。私たちの社会にも、これが正しいとされてきた基準や規範があります。しかし、終わりの日には、天の父が植えておられないのですから根こそぎにされます。

次に、「盲人」とされています。彼らは、自分たちこそが律法の解釈者で盲目の案内人だと自負していました。「ローマ 2:19-20 また、律法のうちに具体的に示された知識と真理を持っているので、目の見えない人の案内人、闇の中にいる者の光、愚かな者の導き手、幼子の教師だ、と自負している…」けれども、彼ら自身が盲目なのです。イエス様は、ヨハネ 9章の終わりで、自分自身たちが見えると言い張るから、盲目のままにいて、罪は残る、と言われました。自分たちが盲目であることを気づいていたら、その時点で目が開かれることを話しておられます。ですから、盲

目であるならば、盲目の人を導いたら、二人とも穴に落ちます。穴については、詩篇において数多く、つまずいて滅んでしまう人として描かれています(7:15 等)。

要はイエス様が言われたかった事は、「彼らのことは放っておきなさい」なのです。自分が信頼している権威、自分が依拠しているものがある、それが自分の信じていること、確信していることについて、いかに間違っているかとやかく言っても、放っておくのです。そもそも神が救いに定められておられない者たちと議論したところで平行線になるのですから、イエス様が行われているように、父なる神の裁きに任せればよいのです。

15 そこでペテロがイエスに答えた。「私たちに、そのたとえを説明してください。」16 イエスは言われた。「あなたがたも、まだ分からないのですか。17 口に入る物はみな、腹に入り、排泄されて外に出されることが分からないのですか。18 しかし、口から出るものは心から出て来ます。それが人を汚すのです。19 悪い考え、殺人、姦淫、淫らな行い、盗み、偽証、ののしりは、心から出て来るからです。20 これらのものが人を汚します。しかし、洗わない手で食べることは人を汚しません。」

イエス様は、とても分かり易い説明を行われています。手の洗いの清めなど、それは外から中に入る汚れとして気にしているけれども、そもそもそんなことで、神に対して汚れた者とはならないということです。常識的に、その汚れは中に入っても、そのままトイレに流れるだけだと言われています。しかし、本当の意味で汚すのは心のほうだということです。外から入るものは汚さないが、内から出て来るものが汚すというのは、心に罪と悪があるのでそれが私たちを汚すのだということです。

先ほどは、イザヤが預言したところを見ました。口先では神を敬っているが、心は神から遠く離れているという厳しい言葉です。けれども、エレミヤ書においては、こう書かれています。「17:9 人の心は何よりもねじ曲がっている。それは癒やしがたい。だれが、それを知り尽くすことができるだろうか。」そして、主がエレミヤに対して、新たな契約をイスラエルとユダに与えられることを約束されました。「31:33 わたしは、わたしの律法を彼らのただ中に置き、彼らの心にこれを書き記す。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。」心が神から遠く離れていて、何よりも邪悪、ねじ曲がっている、主ご自身が心に御霊を降り注がれることによって一新させてくださるのです。そして、イエス様ご自身がその律法の要求である死、罪を犯す者たちに対して要求する死を身代わりに受けてくださったので、律法がイエス様にあって全うされました。

これまで律法の中では、レビ記 11 章にあるように、イスラエルが他の諸国民と異なる、聖別された民として、食べてよい動物と汚れた動物とに区別されていました。けれども、その中においても主と自分とが、世の汚れから免れて生きる、霊的な関係を分かり易く見える形で表しているものであり、それ自体が汚れているということでもないのです。多くの人が豚には菌があると、タコや

イカにも菌が付いているとか言っていますが、確かにそうした衛生面はありますが、そうではなく、目に見える形で、霊的な事柄を示しているにしか過ぎません。ちょうど、出エジプトがこの世からの贖いを示しているのように、食物規定が聖めを示しているのです。

ところが、時を経て、そうした主との関係の内実がおそろかにされて、食べる、食べないということがそのまま、主との関係を定めるというように変えられてしまいました。イエス様は、律法を変更されたのではなく、律法にある精神、その精髓を回復されたのであり、御霊によってそのことが可能になるのです。そこで今は、私たちは主の名によって食べるのであれば、何でも食べるのに妨げられることはないと教えられています。「I テモ 4 章 4:4-5 神が造られたものはすべて良いもので、感謝して受けるとき、捨てるべきものは何ともありません。神のことばと祈りによって、聖なるものとされるからです。」パウロがここで話しているように、神のことばと祈りの中で、御霊によって心に汚れがないか、確かめて行く必要があります。イエス様が言われている悪を眺めて、自分自身を吟味するのです、「悪い考え、殺人、姦淫、淫らな行い、盗み、偽証、ののしり」ですね。

## **2A 異邦人の信仰 21-39**

このように、神の戒めが与えられたユダヤの民が、心が神から離れてしまっているところを見えています。これは逆に言うと、これらの律法から派生した言い伝えを守り行なっていなくとも、心で神を信じれば、清くされるということを言っているに他なりません。ユダヤ人の使徒たちに、次第に明らかにされていくのが、「非ユダヤ人であっても、律法を守り行なっていない者たちであっても、イエスを信じることによって、その信仰によって清められる」ということです。イエス様は、ご自分が地上で宣教の働きを行われている時は、イスラエル人への宣教に召されていましたが、それでも異邦人にも救いが及ぶことを指し示すような働きを、前もって行われていきます。

## **1B カナン人の女の願い 21-28**

21 イエスはそこを去ってツロとシドンの地方に退かれた。

イエス様は、ガリラヤ湖の辺りにおられたのですが、大きく退かれました。ガリラヤ地方をも避け、なんとツロとシドンの地方にまで行かれています。そこは、ガリラヤ地方の北、地中海沿岸に位置する町で、完全に異邦人の地域です。今のレバノンにあります。ツロの王とダビデが協定を結び、杉の木を調達し、その子ソロモンが大量に杉の木を輸入して、宮殿や神殿の建設にもツロからの職人も携わりました。けれども、ツロやシドンにはバアル信仰が盛んに行われており、シドンの王の娘イゼベルが、アハブ王と結婚することによって北イスラエルにバアル信仰を持ち込みました。そしてカルメル山で、バアルの預言者とエリヤとが霊的な対決をしたのです。

しかし、それでもイスラエルの神を信じた人が、そのシドンから出ています。エリヤが飢饉の時にシドンへ行くように神に命じられて、そこで今にも死のうとしていたやもめと男の子に、パンの粉の

かめと、油の壺から、粉も油も尽きないという徴を与えました。それで彼女はイスラエルの神を信じました。これから出て来るカナン人の女は、まさにそのやもめと同じような信仰を持っていました。

22 すると見よ。その地方のカナン人の女が出て来て、「主よ、ダビデの子よ。私をあわれんでください。娘が悪霊につかれて、ひどく苦しんでいます」と言って叫び続けた。

カナン人と言えば、アブラハムが約束の地として与えられた時の住民です。ヨシュアたちが約束の地に入った時に、ヨシュアたちに対して一気に攻め入って来た王たちが、カナン人の王たちであったことも思い出します。けれども、カナン人というのはその先住民の総称としても使われていて、ツロやシドンにはフェニキア人と呼ばれていましたが、カナン人と呼ばれる時もあります。ユダヤ人が見れば、決して良い印象を持っていなかったでしょう。

けれども、その彼女の娘が悪霊につかれているので、イエス様に癒していただこうとしています。イエス様の噂は、ユダヤ人の間だけでなく周辺の異邦人の間にも広まっていたのです。そして、彼女は典型的なメシアの呼び名、「ダビデの子」を使っています。ユダヤ人の盲人などが、この言い回しを使っていましたが、カナン人が使うと、一種の嫌悪感も弟子たちの中にあっただけではないでしょうか。聖地旅行に行きますと、クリスチャンの旅行者に対して「神の祝福がありますように」と言っていて、物を売りに来る人たちがいます。クリスチャンの言い回しを知っているのですが、彼らはクリスチャンではなくおそらく、ムスリムでしょう。そういった違和感です。

23 しかし、イエスは彼女に一言もお答えにならなかった。弟子たちはみもとに来て、イエスに願った。「あの女を去らせてください。後について来て叫んでいます。」24 イエスは答えられた。「わたしは、イスラエルの家の失われた羊たち以外のところには、遣わされていません。」

イエス様は、弟子たちを遣わして福音を宣べ伝えさせる時に、「異邦人の道に行ってははいけません。また、サマリア人の町に入ってははいけません。むしろ、イスラエルの家の失われた羊たちのところに行きなさい。(10:5-6)」イエス様は、まずイスラエルに、ユダヤ人に遣わされなければなりません。それは、旧約聖書において主なる神がいつも、心に留めておかれていたことです。メシアは、イスラエルを救うメシアであられ、イスラエルが救われることによって異邦人にも祝福が及びます。しかし、イスラエルだけの神ではないのです。イスラエルのためのメシアが、その憐れみによって異邦人にもその祝福を与えるというのが、神のご計画でありました。「イザ 42:6 わたし、【主】は、義をもってあなたを召し、あなたの手を握る。あなたを見守り、あなたを民の契約として、国々の光とする。」キリストについての預言ですが、イスラエルの民の契約となっただけで、それから国々、つまり諸国の民、異邦人の光となると言われました。

そして事実、イエス様はユダヤ人の中で十字架に付けられ死なれ、葬られて、甦られました。そ

こには異邦人はいませんでした。しかしイエス様は、「あなたがたは、全ての国民を弟子としなさい。」と命じられて、その時には既にイスラエルだけでなく、異邦人にもイエス様の弟子を造るよう命じられていたのです。聖霊が降り注がれる時、それはエルサレムにいるユダヤ人の弟子たち120名の間で注がれたのであり、ユダヤ人の間の出来事でした。またペテロの最初の説教は、すべてユダヤ人に対して向けられたものでした。初めの教会はユダヤ人の教会だったのです。ところが、次第に聖霊によって、サマリア人にも福音が宣べ伝えられ、そしてギリシア系のユダヤ人が異邦人にも福音を語り始めて行ったのです。そしてついに、主ご自身が聖霊によってペテロに、ローマの百人隊長コルネリウスに福音を伝えることを命じられて、彼と一家が聖霊のバプテスマを受けたのです。こうやって、イスラエルの中に救いが起こされ、そして異邦人への光となるという順番が、神の御心としておられたことでした。

しかし、すべての時代に、ユダヤ人であっても異邦人であっても、神とのつながりにとって本質的なもの、変わることはないものがありました。それは心における神への信頼です。そのやり取りが、カナン人の女とイエス様との間に繰り広げられます。

25 しかし彼女は来て、イエスの前にひれ伏して言った。「主よ、私をお助けください。」26 すると、イエスは答えられた。「子どもたちのパンを取り上げて、小犬に投げてやるのは良くないことです。」27 しかし、彼女は言った。「主よ、そのとおりです。ただ、小犬でも主人の食卓から落ちるパン屑はいただきます。」28 そのとき、イエスは彼女に答えられた。「女の方、あなたの信仰は立派です。あなたが願うとおりにするように。」彼女の娘は、すぐに癒やされた。

女は、ダビデの子などというユダヤ人特有の呼び名は使いませんでした。とても単純に、「主よ、私を助けてください。」と言っています。ここに彼女の心が表れています。ただ、これだけだったのです。イエスは主であるということ。そして、助けてくださいというだけのことだったこと。他の尾ひれを付ける必要がありませんでした。

そして、イエス様は、喩えをつかって分かるようにされました。ここでの小犬とは異邦人のことです。そして子供とはイスラエル人のことです。けれども、異邦人であってもそのおこぼれをいただくでしょう、というのが彼女の言い分であり、実はそれこそが神が異邦人にも救いを与える働きを、的確に説明し、表現していました。これこそが神の恵みの表れです。異邦人にも福音が伝えられるということは、私たちは当たり前のように考えるかもしれませんが、いいえこれこそが、不自然なことでした。22章には、王子の披露宴の喩えがあります。そこで招かれているのがユダヤ人なのですが、それぞれが断っています。それで王は、大通りに行って、出会った人を片っ端から招いたのです(22:9)。ユダヤ人が断ったから、王がご自分の恵みと気前良さを分かち合う存在として、そこら辺にうろろしている人たちを招いたのです。これが、私たちなのです。何か資格があって、招かれたのではありません。この世の愚か者を選び、弱い者を選び、取るに足りない者、に下

されている者、無に等しい者を神は選ばれました。

他には、ローマ人への手紙 11 章に書かれています。そこでは、パウロは異邦人のキリスト者に対して、高ぶらないようにと戒めるために書いてあるところです。異邦人は野生種のオリーブの木であり、イスラエルは栽培種のオリーブの木です。その栽培は、アブラハム、イサク、ヤコブというイスラエルの父祖によって行われてきました。そこに、一部の枝が不信仰によって折られてしまったところに、野生種のオリーブである私たちが接ぎ木されたのです。実際には、野生種の枝を栽培種の枝に接ぎ木しても育たないのだそうです。しかし、わざとパウロはそのような喩えを使って、異邦人がイスラエルのメシアにつながることを、いかに不自然なことなのかを際立たせているのです。だから、高ぶらないでいなさいと警告しています。私たちがつながっているのは、もっぱら神の慈しみによるもので、自分たちもそこに留まっていないなら、切り倒されることもあるのです。そして、もしイスラエル人も不信仰の中に居続けないのであれば、私たちがイエス様を信じる以上にもっと容易く、再び接ぎ木されるのだと論じています。

いずれにしても、ここにカナン人の女にある立派な信仰、小犬にさえ主人のパン屑をいただくという信仰があって、それで娘が即座に癒されました。

## 2B イスラエルの神への栄光 29-31

29 それから、イエスはそこを去ってガリラヤ湖のほとりに行かれた。そして山に登り、そこに座っておられた。

マルコによる福音書によると、ガリラヤ湖の東岸にあるほとりにイエス様は行かれています(マルコ 7:31)。そこは、かつて悪霊レギオンに取りつかれた男たちがいた、デカポリス地方です。そこには多くの異邦人が住んでおり、わずかにユダヤ人も住んでいました。そこにある山にイエス様が座られました。その山に、ユダヤ教のラビが人々に教える姿勢ですね、山上の垂訓を思い出します。

30 すると大勢の群衆が、足の不自由な人たち、目の見えない人たち、手足の曲がった人たち、口のきけない人たち、そのほか多くの人をみもとに連れて来て、イエスの足もとに置いたので、イエスは彼らを癒やされた。31 群衆は、口のきけない人たちがものを言い、手足の曲がった人たちが治り、足の不自由な人たちが歩き、目の見えない人たちが見えるようになるのを見て驚いた。そしてイスラエルの神をあがめた。

ユダヤ人たちの間だけで行われていたみわざを、イエス様はなんと今、異邦人たちも含まれているであろう群衆の中でも行われました。口のきけない人、目の見えない人、足の不自由な人を立ち上がらせるのが、キリストが来られたことの徴であることは、イザヤ書 35 章 5-6 節に書かれ

ていますが、それを主は異邦人の混じった群衆の中でも行われているのです。そして、ここでの特徴は、「そしてイスラエルの神をあがめた」と言っていることです。ユダヤ人であれば、わざわざイスラエルの神と強調する必要はありません。イエス様は、カナン人の女に対してあのように、一見、冷たくあしらっておられましたが、実はご自分がなされることを初めからご存じだったのでしょう。イスラエルに与えられていた祝福が、神の恵みによって異邦人にも広がっているのです。

### 3B イエスが率先された四千人の給食 32-39

32 イエスは弟子たちを呼んで言われた。「かわいそうに、この群衆はすでに三日間わたしとともにいて、食べる物を持っていないのです。空腹のまま帰らせたくはありません。途中で動けなくなるといけなから。」33 弟子たちは言った。「この人里離れたところで、こんなに大勢の人に十分食べさせるほどたくさんパンを、どこで手に入れることができるでしょう。」

前回、14章で同じようなやり取りを私たちは読みました。成年男子だけで五千人いて、五つのパンと二匹の魚で満腹させ、十二かごにいっぱいになるほど残ってしまった、給食の奇跡です。それは、ユダヤ人のいる地方で行われました。どこで行われたかに、意見が異なりますが、北東のベテスダの辺り、あるいは北西のゲネサレ平野のそば、今のタビハと呼ばれるところではないか？ということですが、いずれにしてもユダヤ人のいたところですが、しかし、同じような会話でありながら、少し違います。

五千人の給食の場合、弟子たちが、群衆が空腹なのを気にしてイエス様に話かけました。ここでは、イエス様の方が率先して弟子たちに話しかけておられます。ここに、もしかしたら弟子たちのためらいがあったかもしれません。ユダヤ人に対しては、いろいろ気遣いができるのに、異邦人たちが多くいる群衆に対して、同じような気遣いは出てこなかったのでしょうか。こうした心の中での差別は、誰しもが持っています。ユダヤ人と異邦人の間には大きな壁がありましたし、お金持ちか貧乏人かでも、教会でどの席に座ってもらうかで、心の中で差別しているとヤコブは指摘しました(2:4)。しかし、イエス様の前では、神の国の中ではえこひいきがありません。

34 すると、イエスは彼らに言われた。「パンはいくつありますか。」彼らは言った。「七つです。それに、小さい魚が少しあります。」35 そこで、イエスは群衆に地面に座るように命じられた。36 そして七つのパンと魚を取り、感謝の祈りをささげてからそれを裂き、弟子たちにお与えになったので、弟子たちは群衆に配った。37 人々はみな、食べて満腹した。そして余ったパン切れを集めると、七つのかごがいっぱいになった。38 食べた者は、女と子どもを除いて男四千人であった。

五千人の給食と似たような風景です。パンの数とかが、違います。パンはこちらは七つです。魚もありますが、小さい魚だと言っています。あと、こちらはイエス様が癒しの業を行われてから既に三日経っています。五千人の給食は一日しか経っていませんでした。それから、群衆を座らせて

いますが、五千人の給食では草の上に座らせたとあります。つまり、雨季が終わろうとして春になっている時期です。しかし、こちらはありません。おそらく春ではありません。そして、イエス様が感謝の祈りをささげたのは同じで、弟子たちに配らせて、みんなが満腹したのも同じです。そして余ったパン切れが、五千人の給食では十二籠でしたが、こちらは七籠です。さらに、ここの「籠」のギリシア語も違います。五千人の時はコフィノスという言葉で、いわゆる私たちの想像するような籠の大きさです。けれども今、ここで使われているのはスプリスで、大量の穀物を入れる籠で、人が入れるほどのものです。

イスラエル人に対しては十二の数字が出てきたのですが、それは神の家の統治であることを話しました。十二使徒と教会にもその考えが広がられています。神の統治です。そして七は完全数です。神の数字です。これをもって神がなされたということが、宣言されています。神が七日目に、休まれてそれを聖とされたというところでも七が使われていましたね。ですから、異邦人への憐れみのわざをもって、神はご自分の業を完成されたと考えておられるのです。神はまだ、異邦人の間から救いが起こされることを願われています。その救いが完成したら、次に神はイスラエルを救われると、ローマ 11 章 25-26 節に書かれていることです。

39 それから、イエスは群衆を解散させて舟に乗り、マガダン地方に行かれた。

主は、同じような圧迫を受けられていたのかもしれませんが、五千人の給食の時も無理やり解散させて、ご自分が退かれ、弟子たちは舟に載せましたが、ここでも給食をした後に解散させておられます。神をあがめるのではなく、腹がいっぱいになったので、別のことを求めるのを知っておられたのかもしれませんが。いずれにしても、舟に乗って、向こう岸、北西にあるマガダン地方に渡られました。そう、ここはマグダラのことです。ミグダルと、今はヘブル語で呼びます。

イエス様が、退かれながら、何を持っておられたのか思い巡らしてみたいと思います。ユダヤ人たちが、その指導者が人の教えによってユダヤ人を縛っていて、そのためにご自分の福音が人々の届かない状況でした。私たちに、人から言われたこと、あるいは自分自身が勝手に思っていることによって自分を縛っていないでしょうか？そして、自分は神の恵みから外れているということが分かりながら、それでもなお「助けてください」と投げすがる信仰と大胆さを持っておられるでしょうか？わずかにしか与えられていないのに、疎外されているのに、それでも主に近づこうとする飢え渇きがあるでしょうか？与えられるのをただ待っているだけ、いや与えられても受け取ろうともしない受動的な姿から、食らいついてでも離さないというような、へりくだりと飢え渇きが、イエス様の恵みを受けるのに必要なことです。